

いわさきちひろの想いと共に
～子供達の居場所となる美術館をめざして～

【執筆者】

あずみの
安曇野ちひろ美術館 副館長・学芸員
うえしま ふみこ
上島 史子

【掲載誌】季刊「栄養教諭」第70号(ジャパンブリント株式会社)

～～～～～～～～～～

はじめに

ちひろ美術館が開館したのはいわさきちひろの没後3年目の、1977(昭和52)年のことでした。「ちひろの絵をいつでも見られる場所を」という声が寄せられるなか、ちひろの遺族から全作品とその著作権の一部の寄贈を受けて、1976年に財団法人いわさきちひろ記念事業団(現在は公益財団法人)を設立。はじめは「いわさきちひろ絵本美術館」という名称で、東京都練馬区下石神井ねりま くしもじやくじいにあった自宅の敷地の一角につくられた小さな美術館でした(現:ちひろ美術館・東京)。開館当初のこの名称には、ちひろの個人美術館であると同時に、広く「絵本」の文化に寄与したいという思いが込められています。絵本を専門とする美術館としては、世界で最初の美術館であることは、後からわかったことでした。

いわさきちひろ絵本美術館の開館20周年にあたる1997年、ちひろの両親が戦後に開拓農民として入植した地であり、自然豊かな長野県きたあずみぐんまつかわむらの北安曇郡松川村に「安曇野ちひろ美術館(以下、安曇野館)」も開館しました。安曇野館は北アルプスをのぞむ広々とした松川村営の「安曇野ちひろ公園」のなかにあり、豊かな自然と地域の方々とのつながりのあるこの地だからこそできる、さまざまな活動を展開しています。

2002年には東京のちひろ美術館(以下、東京館)をバリアフリーの建物にするため全面リニューアルしました。

本稿では、「子供のしあわせと平和」「絵本文化の発展」というふたつの理念を掲げ、子供達の居場所となるべく模索してきた、東京と安曇野の『ちひろ美術館』でのこれまでの活動を紹介します。

子供を描いた画家・いわさきちひろ

いわさきちひろ(1918年～1974年)は、第二次世界大戦が終戦となった翌年、27歳のときから画家としての歩みを始め、紙芝居や絵本、絵雑誌、教科書など、子供のための印刷美術の世界で活躍した画家です。ちひろが生涯をかけて、飽くことなく描き続けたテーマは「子供」でした。ちひろが絵を描いた当時から半世紀が経とうとしている今も、その絵を見た人からは「うちの子にそっくり」「自分の子供のころに似ている」という声が多く寄せられます。ちひろの名を知らなくても、ちひろの描く愛らしい子供の絵は、どこかで目にしたことがあるという方も多いのではないのでしょうか。

ひとり息子を持つ母親だったちひろは、まだ女性が働くことが困難だった時代に、家族との暮らしと仕事の両方を大切にしながら、絵を描き続けました。当初のちひろの仕事場は、家族が集う居間も兼ねていて、子育てをしながら仕事をする日々でした。「小さい時は抱いたりおぶったりしながら仕事で大変でした。置いたはずの絵の具がない——と気づいた時には、顔じゅう黄色にして絵の具をなめていたの。絵の具には毒がはいっているかと思って、まっ青で病院にとんでいったこともありました。」と、後にちひろは子育ての頃を振り返っています。

息子は最高のモデルでもありました。ちひろは息子の日常のしぐさや日々の成長をみつめ、動きまわるその姿を折に触れてスケッチし、どんな格好をした子供も自在に描き出せるデッサン力を身に付けていきました。

息子が成長してからも、ちひろのなかには、いつもはつらつ澀刺と動き回る子供の姿があったのでし

よう。「私のなかには、たくさんの子供がいるの。その子達が筆の先から出てくるのよね」と、編集者に語ったこともあるといいます。特に得意としたのはあかちゃん、月齢ごとの体の特徴や仕草の違いまで、的確に描き分けています。透明水彩絵の具のにじみや濃淡を駆使して描いたあかちゃんからは、肌の感触やお乳のにおいまでもが伝わってきそうです。「小さい子どもがきゅっとさわるでしょ、あの握力の強さはとてもうれしいですね。あんなぼちゃぼちゃの手からあの強さが出てくるんですから。そういう動きは、ただ観察してスケッチだけしていても描けない」と、ちひろは語っていました。

ちひろの絵には多くの母子像があるように感じられますが、実は数としては決して多くありません。子供だけが描かれた作品であっても、安心した表情やのびのびとした姿に、その子を見守る母親の存在を、見る側が自然に感じているのかもしれません。無垢な子供を母親の愛情で包み込むように描き続けたその絵には、母親はやさしく、強い存在であり、子供を守りたいという思いは世界中の母親に共通するものだという、ちひろの信念が込められています。

母親のまなざしを感じる作品がある一方で、「子どもを描いていると、自分の小さいときのことを自分で描いているという感じがします」と自ら語っているように、だれもがもっていたはずなのに大人になるにつれて忘れがちな「子供の心」を、ちひろは失うことなく絵本に表現した画家でもありました。1968年に発表した絵本『あめのひのおるすばん』は、雨の日にひとりでお留守番をする幼い少女の心の動きをテーマに、ちひろ自身が文章も手がけた絵本です。喜びとともに、寂しさや不安を感じることもある子供の感じやすい心を伝えるには、詳しく描いて説明するのではなく、必要最小限のもので暗示し、自由に想像する余地を残す“引き算”が大切であることを、ちひろはこの新しい絵本づくりを通してつかめました。

ちひろの分身のような少女を主人公にした絵本づくりは、その後も亡くなる前年まで1年に1冊ずつのペースで続けられ、『あかちゃんのくるひ』『となりにきたこ』『ことりのくるひ』『ゆきのひのたんじょうび』『ぼちのきたうみ』の6冊が制作されています。ちひろ自身が絵も文も手がけたこれらの絵本は、「感じる絵本」とも呼ばれ、日本の絵本に、当時の主流であった物語絵本とは異なる新しい絵本の可能性を開くことにもなりました。

ちひろの願い

ちひろは平和な情景を描く一方で、戦争のなかに生きることを余儀なくされた子供の姿も描いています。第二次世界大戦中、空襲のなかを逃げ惑った体験を持つちひろにとって、「戦争を二度と繰り返してはいけない」という思いは切実でした。

1973年、ちひろはベトナム戦争への反戦の思いを込めた絵本『戦火のなかの子どもたち』を発表します。戦争が激化していくなか、今何かしないとベトナムの子供達がみんななくなってしまうのではないかと^{きん}危惧し、自分の戦争体験と重ねて戦時下に生きる子供の姿を描きました。体調を崩し、入退院を繰り返しながらも1年半をかけて描いたこの絵本は、ちひろが完成させた最後の絵本となりました。

ちひろは次のように語っています。「青春時代のあの若々しい希望を何もかもうち砕いてしまう戦争体験があったことが、私の生き方を大きく方向づけているんだと思います。平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます」。愛情に包まれた子供の絵と、戦火にさらされた子供の絵とは対照的ですが、どちらの絵にも、「世界中のこどもみんなに平和としあわせを」ということばに象徴されるちひろの願いが込められています。

初めての絵本美術館

ちひろが画家としての活躍を始めた頃は、本のために絵を描いても画家の著作権は認められておらず、原画が印刷原稿として粗雑に扱われたり、戻ってこないことも多かったといえます。ちひろをはじめ、当時の画家たちが粘り強く著作権確立の運動を行い、ようやく画家の手元に原画が返却されるようになったのです。

『ちひろ美術館』にはそうして遺されたちひろの作品約 9,600 点が収蔵されています。そのなかには 40 冊あまりの絵本の原画のほかに、絵雑誌や童話集、教科書、広告、カレンダーの仕事、初期から晩年までのデッサンやスケッチ、油彩画なども含まれていて、ちひろの画業の全体が見渡せるようになっています。

絵本では印刷されて製本されたものが作品となりますが、原画には印刷では伝わりにくい筆触や画材の質感も見ることができ、そのものが絵画としての魅力を持っています。今でこそ国内外に絵本美術館が増え、絵本の原画展も数多く開催されていますが、「いわさきちひろ絵本美術館」が開館した 1970 年代には、まだ絵本の原画に美術的価値を認める人は多くありませんでした。海外においても日本と同様に、あるいはそれ以上に絵本原画の保存に対する意識が薄く、歴史的に重要な絵本でさえ多くの原画が散逸してしまっていました。1980 年代半ばから『ちひろ美術館』では、本格的に世界の優れた絵本画家の作品のコレクションをはじめました。原画を保存して後世に残し、広く公開していきたいという美術館の理念は、多くの画家たちの共感を得て、コレクションは充実していきました。

現在収蔵されている世界の絵本画家の作品は、世界 35 カ国 221 人の画家による 17,900 点にのびります(2022 年 3 月現在)。コレクションのなかには、小さなノーベル賞ともいわれる国際アンデルセン賞画家賞や、ブラティスラヴァ世界絵本原画展(BIB)、ボローニャ国際児童

図書展など国際的な絵本賞の受賞者の作品も多数含まれています。

世代を超えて読みつがれ、ミリオンセラーとなった絵本の原画もあります。モンゴルの民族楽器・馬頭琴^{ばとうきん}にまつわる民話の絵本『スーホの白い馬』や、あかちゃんの絵本として圧倒的な人気を誇る『いないいないばあ』^{まつたに}(松谷みよ子文 瀬川康男^{せがわやすお}絵 童心社)の原画のほか、世界中の子供達に愛されている『はらぺこあおむし』(エリック・カール作 もりひさし訳 偕成社)のイメージをもとに描かれたエリック・カールの 1m 近い大きさのあおむしの絵もあります。

ソビエトの時代にロシアの画家エフゲーニー・ラチョフがウクライナの民話を描いた絵本『てぶくろ』は、いくつもの国で翻訳され、日本でも 1965 年に出版されて以来、ずっと子供達に愛されてきたミリオンセラーです。おじいさんが落としたてぶくろに、ねずみやきつね、ついには熊までが入ってきて、いっしょにくらします。ラチョフは民話のなかに込められた寓意^ぎを伝えるために、ウクライナ地方の民族衣装を着た姿で動物たちを描きました。今年 2 月に、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まり戦争が長期化するなかで、今再び、この絵本が注目を集めています。

日本ではほとんど知られていないアジア、中南米、アフリカの画家たちの作品もあります。地域の文化や自然に根差しながら、画家の個性が発揮された絵画表現は新鮮で、絵本先進国のヨーロッパやアメリカの画家達にもひけをとれません。

絵本は 0 歳から 100 歳を越える人までが楽しめ、国の違い、民俗や言語の違いを越えて、共に楽しめる文化財です。ちひろ美術館コレクションは、優れた表現力を持った絵本画家が世界中にいて、どの国や地域の文化もそれぞれに魅力的であること、子供達に心を寄せて描いた絵本は国境を超えて伝わることを、物語っています。

子供達の居場所となるために

『ちひろ美術館』は、ちひろと世界の絵本の原画を収集し、大切に保存しながら、広く公開する美術館であると同時に、子供達が居心地よく過ごせる場所を目指してきました。

ちひろの自宅の跡地にある「ちひろ美術館・東京」は、ちひろの家に遊びに来たようなアットホームな空間です。1977年に自宅の半分を建て替えた小さな建物として開館して以来、増改築を繰り返してきた建物を2002年に全面リニューアルし、ベビーカーや車椅子でも巡ることのできるバリアフリーの建物としました。展示室の絵の高さは、子供達や車椅子の方でも見やすいように、やや低めに設定しています。展示室のほかにも、国内外の絵本を自由に読める図書室や、おもちゃや授乳室のある子供のへやもあり、いつも子供達が思い思いに過ごしています。

東京館の開館20年目の1997年に、北アルプスの山をのぞむ豊かな景観のなかに開館した「安曇野ちひろ美術館」は、心を開放してゆっくり過ごしてほしいと「絵をみなくてもいい美術館」をコンセプトに持ちました。入館証をつけてもらえば一日何度でも出入りでき、公園を散策したり、昼寝をしたり、気が向けば絵本を読んだり、優れた美術に出会うこともできる、そんな美術館です。

美術館では静かに絵を見なさい、絵を見て勉強しなさいと言われることが多いのですが、閉じられた暗い空間(美術館では作品保護のために照明を暗くしています)で緊張しながら絵を見ていても、楽しい気持ちになれる子は少ないでしょう。まずは楽しい時間を過ごして、美術館という場所を好きになってもらいたいと思います。美術館に来ることが楽しくなれば、素敵な絵との出会いも、いつかあるかもしれません。大切な一点の絵との出会いは、本や音楽とおなじように、生きる力を与えてくれることもあります。

2007年からは、安曇野館も東京館も、高校生以下は入館無料とし、いつでも気軽に訪れることができるようになりました。子供が安心して過ごせる場所が少なくなっている昨今、『ちひろ美術館』が子供達の居場所のひとつになればと願っています。

子供と美術・絵本との出会いの場に

デジタルの時代にあっても、優れた絵本は世代を超えて読み継がれ、今も毎日のように新しい絵本が生まれています。『ちひろ美術館』では、子供達と絵本を繋ぐさまざまな活動にも取り組んでいます。

定期的で開催している「絵本のじかん」では、地元の読み聞かせの会の方々とも協力しながら絵本を選び、読み聞かせをしています。幼児だけでなく、自分で絵本を読める子供達も、絵本を読んでもらうことで物語の世界により深く入りこむことができます。

展覧会と関連して、絵本画家たちと子供達のワークショップも開催してきました。チェコのクヴィエタ・パツォウスカーさんによる安曇野ちひろ公園での仮装パレードや、荒井良二さんの「自分を応援する旗をつくろう」、武田美穂さんの「ともだちおぼけをつくろう!」、スズキコージさんの「ズキン DE パレード〜イカス服とイカス王冠をつくろうぜい〜」、田島征彦さんの「さあ、みんなでじごくゆきじゃ! じごくのじゅうにんにへんしん!」など、画家と子供達のエネルギーの相乗効果で大いに盛り上がりました。画家とともに体をいっぱいに使った創作活動は、子供達にとっても忘れがたい体験になったことでしょう。

『ちひろ美術館』は子供が初めて出会う美術館としての「ファースト・ミュージアム」の取り組みにも力を入れています。東京館では0歳から2歳のあかちゃんを対象に、物語への入り口となるわらべうたを親子で楽しむ「わらべうたあそび」や、あかちゃんと展示室をめぐる「あかち

やんのための鑑賞会」を、安曇野館では「ベビーカーでおでかけしよう！ファーストミュージアムデー」を開催しています。また、安曇野館の地元の松川村で生まれる子供達には、美術館が0歳で、村が6歳で絵本をプレゼントするブックスタートの取り組みを通して、絵本との出会いをつくっています。

あかちゃんのころから絵本や美術に自然に出会えるような環境をつくるためにも、安心してあかちゃんを連れて来られる美術館にしたいと思います。

地域の学校との連携

子供達に来てもらうためには学校との連携も大切になります。学校の先生に向けた内覧会や意見交換会、出前授業、職場体験実習の受け入れなどにも取り組んできました。

安曇野館では、2002年から地元の松川^{まつかわ}中学校に呼びかけて、夏休みに美術館を舞台に活動する中学生ボランティアの受け入れも行ってきました。展覧会のために安曇野にきたアーティストと交流して、その作品を来館者に紹介する活動から始まり、絵本の読み聞かせ、美術館の建物のガイドツアーなど、毎夏さまざまな活動に挑戦しています。

なかでも人気が高いのが、ちひろの水彩技法ワークショップです。一般的には乾いてから次の色を重ねることの多い水彩絵の具ですが、ちひろは、水彩絵の具の色のにじみを使って、独特なやわらかな色彩を表現しました。水をたっぷり塗った紙に水彩絵の具をたらし、あえて乾く前に別の色をたらすと、色同士がにじみ合っていくにじみの技法は、実際にやってみると子供から大人まできれいな色合いを表現することができ、ちひろの技法の理解にもつながります。中学生たちは、^{せつご}接遇の研修を受けて気持ちの良い対応を心掛けながら、参加者にちひろの技法を解説し、実演して、制作を手伝いました。ワークショップの終了後は会場の片付けも

行います。夏休みに何度も美術館に来てくれる生徒もいて、回数を重ねるごとに緊張がほぐれ、参加者といきいきと交流する姿が印象的でした。参加者からも、「楽しかった」「中学生の説明がわかりやすかった」「ありがとう」という声が寄せられ、それがまた中学生の励みにもなったようです。

2021年までの20年間に、延べ3,033人もの中学生がボランティアに参加し、多くの来館者と交流してきました。新型コロナウイルス拡大により人との接触が困難となった今年は、美術館や公園の見どころを案内するワークシートを作成してくれ、これも好評でした。

今は最初の頃にボランティアに来てくれていた中学生達が、子供を連れて遊びに来てくれたり、学校の先生になって子供達を引率してくてくれるようになり、活動が根付いてきたことを実感し、感慨深いです。

松川村・安曇野ちひろ公園の活動

2016年には、安曇野館の周囲に広がる松川村営の安曇野ちひろ公園が53,500㎡もの広さに拡充され、「食」「農」「いのち」を体験的に学べる公園となりました。公園のなかには、ちひろ美術館の館長・黒柳^{くろやなぎてつこ}徹子が自身の子供時代をつづり、ちひろの絵でも知られる『窓ぎわのトットちゃん』にちなんだ「トットちゃん広場」がつけられました。トットちゃんを通ったトモエ学園は、子供の個性と可能性を大切にする教育方針のもと、独創的な授業を行いました。^{こばやしそうきく}小林宗作校長は「みんな、いっしょだよ。」と語り、子供達が互いを尊重し、協力しながら学ぶことを大切にしました。広場の中にはトットちゃんや友達が学んだトモエ学園の電車の教室が、地元の長野電鉄から寄贈された電車の車輌によって再現されています。教室のなかには設置された机や椅子は、長野県池田^{いけだ}工業高校の生徒の手によるもので、1940年代当時の教室の雰囲気にあうよう塗装にも工夫を凝らして作られました。古

時計やオルガンは統廃合となる県内の小学校から譲り受けたもの、古い教科書やランドセルは全国から一般募集したもので、大切な思い出の詰まった品々が集まっています。

トットちゃん広場の北側には、松川村の文化や風習を伝える場所として、季節の野菜を育てて収穫できる体験農園や、その農園の野菜や松川村の食材を使った郷土食づくりなどを体験できる体験交流館、かまどづくりから行う飯ごう炊さんや豚汁づくりも体験できる野外学習ゾーンがあります。この公園の活動を支えているのは村の呼びかけで集まった「ちひろ公園サポーター隊」の方々です。農業を主幹産業とした美しい農地と自然が広がる松川村は、「畑の先生」がいっぱいの村です。この公園を村民が活躍する拠点として、意見を出し合いながらさまざまな体験活動を展開してきました。トットちゃんのエピソードにちなんだ田植えや肝試し、運動会、遠足、リトミックなどのほか、祭り、そば打ち、おさんぽマルシェなどさまざまな催しが行われています。また、火おこしや、おにぎり、おやき、とんすけ巻、ピザ、焼き芋などをつくる体験メニューも豊富です。

安曇野ちひろ公園は、野山の恵みを巧みに利用してきた農村と自然とのつながりを感じながら、知識や技術の伝承の機会を通して交流を深めることができる全国的にも類を見ない公園となっています。松川村・安曇野ちひろ公園と、「安曇野ちひろ美術館」は、共に支え合い、共に歩みながら、地域の魅力を高めてきました。地域の人達が輝くことが、ここを訪れる方々も幸せにする、そんな場所をこれからも協力しながらつくっていきたいと思います。

まとめ

今年で「ちひろ美術館・東京」が開館45年、「安曇野ちひろ美術館」が開館25年を迎えました。

ちひろが亡くなって半世紀近い月日が経つ

今も、世界で戦争が絶えることはなく、多くの子供達が戦火にさらされています。経済格差の拡大のなかで子供達の貧困が社会問題となり、感染症の拡大や、環境破壊によって、未来が見えにくくなっています。子供達にとって決して生きやすいとはいえない今の時代、『ちひろ美術館』は子供達が安心して過ごせる居場所、子供達が美術や絵本と出会う場所、いきいきと輝ける場所となっていけるよう、今後も活動が続けていきたいと思います。